

「私の平和」

読谷小学校 5年3組 中曾根 衣吹

私は、五年生のみんなと平和学習で歩いた。高志保、波平、都屋の慰霊碑をまわった。戦争の時はどうやってにげたのかを考えて歩いた。昔は、はだした。たかもしれない。雨が「はな」どなかかったかもしれない。必死になつてにげたかもしれない。泣きながらにげたかもしれない。私は、とてもこわくなつた。

学校で平和の詩の授業をした。名嘉憲夫さ

んがつくった。「沖繩うちなーや皆みんな、変わかって「行いちゆるる

の詩を読みながら考えた。題名の意味は「沖繩のすべてが、変わって行く」という意味だろう。詩を読むと泣きそうになった。ばくだん、銃こけき、悲めい、血、けむり、がソリンのにおい、人の死体、小さい子が泣く後ろ姿、ばくだんのけむり、赤い村が見えた。すべてが重なり、心も体もふるえあがる。七十四年前の戦争を見ているようで、名嘉さんが体験したことがわかるようで、痛々しい日々が再

びもどってきそりだ。名嘉さんは、もっとならいい思いをしたはずだし、書くだけでもむねが重くなっているはずだ。この詩を共通語になおして読んでみた。あまり気持ち伝わらなかつた。やっぱり、うちなーぐちの詩の方が私のなかに伝わってくるものがあることに改めて気がついた。

私は、ふと「白旗の少女」という話を思い出した。一人で休まわっていた少女が、その中で、手、足がないおじいさんと目が見える

お、あじが弱いおばあさんと出会い話だ。おじいさんとおばあさんは、白旗を必死につくり、少女に、

「外へ行って、ふっておいで。」

と言った。白旗を持たせたというこの話は実話だった。一番心に残ったのは、少女が白旗をふっている時に、笑顔でアメリカ兵に手をふったという場面だ。なぜなら、父も母もいない。家族とはぐれてしまったという状態なのに、少女がとも笑顔になっっているからだ。

私だ。たらきつとできない。笑顔がつくれない。だけど、少女はちがった。また、ワさいぐらいなのに、少女らしく笑っていた。私は、このことを、とても考えきれなかった。だって、少女の兄も父も死んでしまっているからだ。それに、家族もどこにいる分かっていな。そり思いと、私は、泣きたくなかった。私だ。たらおもいきり笑えない。だから少女は、すごい。

平和学習をふりかえって、本当の平和は、なんだろうと思った。私は、思う。本当の平和とは、みんなが笑える、みんながやさしい心を持っていて、ということだ。本当の平和とは、何か。みんな思っていることはちがう。だから、正かいない。私は、私の考えで、一歩、一歩未来へこの平和を大切にしていって、最後まで生きたい。